

トランプのイラン政策変化とイスラエル —分析

ラムジー・バルード著、脇浜義明訳、Palestine Chronicle、2025年4月8日 *脚注は訳注



アメリカ大統領ドナルド・トランプ、イスラエル首相ベンヤミン・ネタニヤフ、イラン大統領マスード・ベゼシュキアン（デザイン：Palestine Chronicle）

トランプが予想外にイランとの外交を受け入れたことで、ネタニヤフ首相はバランスを崩し、アメリカとイスラエルの「特別な関係」に亀裂が入ったことを露呈した。

いつものことだが、トランプは関係者を自分の都合のよいように解釈させるしゃべり方をした。

4月7日訪米したイスラエル首相ネタニヤフとの会談で、トランプは「人々、つまりパレスチナ人を他の国へ移動させる」という彼の案を繰り返した¹が、「ガザ戦争が終わることを希望する」とも言った。これは、訪米、というよりは大統領執務室への召喚に応じたネタニヤフにとって、期待と矛盾するものであった。矛盾はそれだけではなかった。トランプが取り上げた話題すべてに矛盾があった。

中東アラブ人コメンテーターが、トランプはイスラエルのガザ・ジェノサイドへの支持を強化したと正しく指摘したのに対して、イスラエル人コメンテーターは、ネタニヤフ訪米一行は、トランプが4月12日からオマーンでイラン政府と「直接対話」— イラン側は「間接対話」としている — をすると聞かされたとき、「当惑」し、「失望」し、「ショック」さえ受けたと言っている。

私たちパレスチナ・クロニクルも、ネタニヤフ等の予定外の訪米と奇妙な記者会見を超えて、ひょっとしたらトランプのペテンのような発言と混乱した外交政策には何か新しいものがあるのではないかと、前に進みたい誘惑に駆られる。

しかし、少し立ち止まって考慮したい点が、何点かある。

¹ トランプはアイルランドの首相との会談ではその案を否定した。

第一に、ネタニヤフに訪米要請があったのは、彼がハンガリーの首都ブダペスト訪問中であった²。ネタニヤフは、逮捕避けるため遠回りして急遽米国へ向かったが、これはネタニヤフにとって異例のことであった。このような訪米には通常十分な準備時間が与えられ、その時間を米国の中東とそれ以外の地域への政策にとって自分の重要性を示すプロパガンダ・キャンペーンに使うのが、常であったが、今回は違っていたこと。

第二に、ネタニヤフに会談の延長を許さなかったという事実は、米側に何か緊急性と深刻性があったことと、ネタニヤフを対等の国の指導者でなく、劣等国の指導者と米側が認識していることを表している。

第三に、トランプが宣言したイランとの「直接対話」はすでに予定されていたことで、ネタニヤフがそれを知ったのはトランプとの会談中か、会談のちょっと前であったと、イスラエル・メディアが伝えている。こんなことは米国・イスラエル関係では前例のないことで、特に最近の米・イスラエル関係では考えられないことである。

第四に、2018年にイランとの核合意を破棄したトランプが今やイランとの対話を推進するというのは、まったく驚くべき展開である。ネタニヤフはきっとかんかんに怒っているに違いなく、これまで自分の最も成功した海外政策は西側とイランの核協定を壊したことだと自負していたので、本当に困惑しているだろう。

第五は、文書とか声明で宣言されていないが、イランとの対話とひょっとして何らかの協定が出来れば、イランと同盟関係にあるあらゆる中東地域の抵抗グループ——イエメンのアンサールッラー（フーシ派）、レバノンのヒズボラ、イラクのイラクのイスラム戦線——との戦線のクールダウン、いや、もっと重要なことに、パレスチナ・レジスタンス運動ハマスとの戦線の鎮静化を迫るかもしれないと、ネタニヤフは思ったに違いない。

第六は、ネタニヤフは、以前の外国訪問と同じように、今回の訪米から何の成果もなく帰国した。ウィニングランが出来る成果、彼の悪口をいう連中を鼻先に親指を当てて嘲笑し、連合政府の仲間には自分こそが正真正銘のイスラエル指導者だと示唆できるシンボリックな成果がなかった。

言うまでもないが、すべてはトランプの気まぐれ、彼の矛盾だらけの性格次第でころころ変わる。しかし、ネタニヤフが米政権を元の対決姿勢へ戻すことができなければ、トランプが信じられない新しい方向に進むとすれば、ネタニヤフは自分のとって不慣れた政治的現実に対処しなければならないであろう。その結果、彼はジェノサイド政策の恐ろしい結果に直面することになるであろう。

² 国際刑事裁判所（ICC）は戦争犯罪容疑で逮捕状を出したネタニヤフを逮捕せよとハンガリーにICC加盟国の義務を遂行せよと命じたが、ハンガリーは拒否し、ICC脱退を表明した。